

# 文の構造を反映したイントネーションの実現について —「奈良のもみじを見た」「奈良でもみじを見た」の分析—

轟 木 靖 子

## 1 はじめに

日本語は高低アクセントの言語であり、語ごとに音の高低のつけかたのパターンがある。ひらがな1文字（拗音は「きゃ」のような2文字）であらわす発音の単位を拍とすると、となりの拍との相対的な高さの関係がある程度決まっている。ある程度、というのは、日本語で一つのパターンに定まっているわけではなく、方言によっていくつか種類があるからである。最も大きな括り方としては、京都を中心とした京阪式アクセント、首都圏を中心とした東京式アクセント、そして東北南部から北関東と九州の一部にみられる一型式アクセントの3種類である。このうち、一型式アクセントには、明瞭な高低の区別がなくどの語もほぼ平らに発音される方言も含まれる。いっぽう、京阪式アクセントと東京式アクセントは語の拍数によってアクセントのパターンがいくつか定まっておき、そのパターンをアクセント型と呼ぶ。

一般的に日本語のアクセントは「雨」と「飴」でどちらを高く言うかによって意味が変わるというような現象に注目されることが多く、東京と京都のアクセントについても、高低のパターンが異なる点が強調されやすい。しかし、このような音の高低の違いが意味の違いにむすびつくものはむしろほんの一部であり、日本語のアクセントで重要なのは、文の内部の語同士の文法的関係や意味的關係を反映する役割を担っていることである。そして、これは東京方言をベースにした標準語にかぎらず、京阪式アクセントや一型式アクセントの方言でも観察されることが知られている。ただ、その文の構造の違いがどの程度実際の発話で反映されるかについては方言差や個人差がある。

本研究は、「奈良のもみじを見た」と「奈良でもみじを見た」という、すべて頭高型（1拍めが高く2拍め以降が低い）の語からなる文の音調について、岡山方言話者と香川方言話者の発話資料を分析し、文の構造を反映したイントネーションが実際の発話でどのようにあらわれるかについて考察をおこなう。

## 2 文の構造とイントネーション

文の構造とイントネーションの関係について論じた研究は多くあるが、どの状態を中立的と考えるかによって立場は二つに分かれる。一つは文の統語構造に着目し、本来であれば文頭から文末にしたがって語アクセントは弱まっていくものであり、それは自然の中立的な文構造と考えられる左枝分かれの構造に適用され（例：白い屋根の家がみえる）、右枝別れ文（例：白い海の家がみえる）では右枝別れの冒頭部分でそれを示すために音調の立ち上げがおこるというものである（窪蘭(1995)）。これに対し、郡(1997)は、同じ修飾－被修飾の関係にある二語であっても、アクセントの弱化がおこるのは修飾語が意味的に被修飾語を限定するときである（例：「奈良のもみじを見た」は「奈良」が「もみじ」を意味的に限定しているが「奈良の法隆寺を見た」では「法隆寺」は奈良にしかなく、「奈良」は「法隆寺」を意味的に限定していない）と述べており、アクセントの弱化を通常みられるものとは捉えていない。アクセントの弱化と

は、高い拍から低い拍への下降で示されるアクセント核のある語においては、その下降幅が抑制されることで示される。下降が抑制されるということは、その下降の位置に至るまでの上昇が低く抑えられることによって実現される。郡（2008）では、音声資料の分析により、Kubozono（1993）の検証をおこない、さらに、意味的な限定関係とアクセントの弱化の生じ方について発話調査および聴取実験により分析・考察をおこなった。個人差はあるものの、修飾語・被修飾語がどちらもアクセント核のある語のとき、被修飾語のアクセントの山の大きさによって限定か非限定かを区別する一つの目安になりうることを示している。

### 3 調査の概要

#### 3.1 「奈良のもみじを見た」と「奈良のもみじを見た」のイントネーションについて

「奈良」「もみじ」「見た」はいずれも1拍めにアクセント核がある語で京阪式でも東京式でも同じアクセントで発音される。1拍めだけが高く2拍め以降が低い。したがって、どちらの文も語アクセントだけを並べると、高低低 高低低低 高低 のようになる。しかし、「奈良のもみじを見た」は「奈良の」と「もみじ」は修飾・被修飾の関係にあり、「奈良の」は「もみじを」を意味的に限定している。「奈良でもみじを見た」では「奈良で」と「もみじを」は修飾・被修飾の関係にない。これは統語構造を比較しても左枝分かれと右枝わかれの文で異なっているが、実際の発話ではどのくらいアクセントの弱化がおこるのか、あるいはおこらないのかを明らかにするため、録音調査をおこない、同一の個人のなかで二つの文をどのように言い分けるかに着目して分析をおこなう。

#### 3.2 調査対象者および時期・方法

調査対象者は岡山方言話者4名、香川方言話者6名の合計10名である。いずれも岡山県あるいは香川県で15歳までを過ごした話者で全員女性である。調査は2019年11月におこなった。調査文をB6サイズのカードに書いたものを提示し、被調査者がそれを読み上げたものをICレコーダで録音した。調査で使った文は以下のとおりであり、同じ文について2回ずつ読んでもらった。

「奈良のもみじを見た」「奈良でもみじを見た」

「奈良のもみじを由美と見た」「奈良でもみじを由美と見た」

「去年奈良のもみじを由美と見た」「去年奈良でもみじを由美と見た」

調査文はそれぞれ「奈良の」と「奈良で」のみを変えたペアの文である。今回は「奈良のもみじを見た」「奈良でもみじを見た」の分析結果について論じる。以下、個々の回答者については岡山方言話者をOKA01からOKA04、香川方言話者をKAG01からKAG06のように示す。また、音声分析にはパソコンソフト「音声録聞見for Windows」（今石編（2005））を使用した。

#### 3.3 調査結果

##### 3.3.1 聴覚印象

最初に、同一話者の「奈良のもみじを見た」「奈良でもみじを見た」の音声を聞き比べた際、両者の差が感じられた話者が3名いた（OKA01、KAG02、KAG06）。この中でとくにOKA01が顕著であり、次にKAG06の比較的わかりやすかった。KAG02は注意深く聞くと差が感じられた。他の話者については、聞いた印象ではそれほど差は感じられなかった。

### 3.3.2 「奈良の」「奈良で」のピークと「もみじを」のピークの差について

10名の「奈良のもみじを見た」「奈良でもみじを見た」の発話のF0曲線を抽出し、視覚的にピークの差が見られるかどうかを確認した。上記の聴覚印象で差が感じられた話者のなかでとくに差が明瞭だったOKA01とKAG06を除くと、F0曲線の形で視覚的に差がわかる者はほぼいなかった。注意深く聞くと差が感じられるKAG02はF0曲線を見てもそれほど差は見い出せなかった。図1、図2にOKA01とKAG02の発話のF0曲線を示す。

図1-1「奈良のもみじを見た」(OKA01)と図1-2「奈良でもみじを見た」(OKA01)を比べると、図1-1「奈良の」に比べて「もみじを」のピークが低くなっているのに対し、図1-2では「奈良で」と「もみじを」のピークがほぼ同じ高さであることがわかる。これは、聴覚印象では、「奈良でもみじを見た」は「もみじ」が強調されているように聞こえる。いっぽう、図2-1「奈良のもみじを見た」(KAG02)と図2-2「奈良でもみじを見た」(KAG02)を比べると、ピークの高さにはそれほど両者に差があるようには見えない。ただ、「奈良の／で」と「もみじを」二つの山の間の谷の深さを見ると、図2-2「奈良でもみじを見た」のほうが深くみえる。

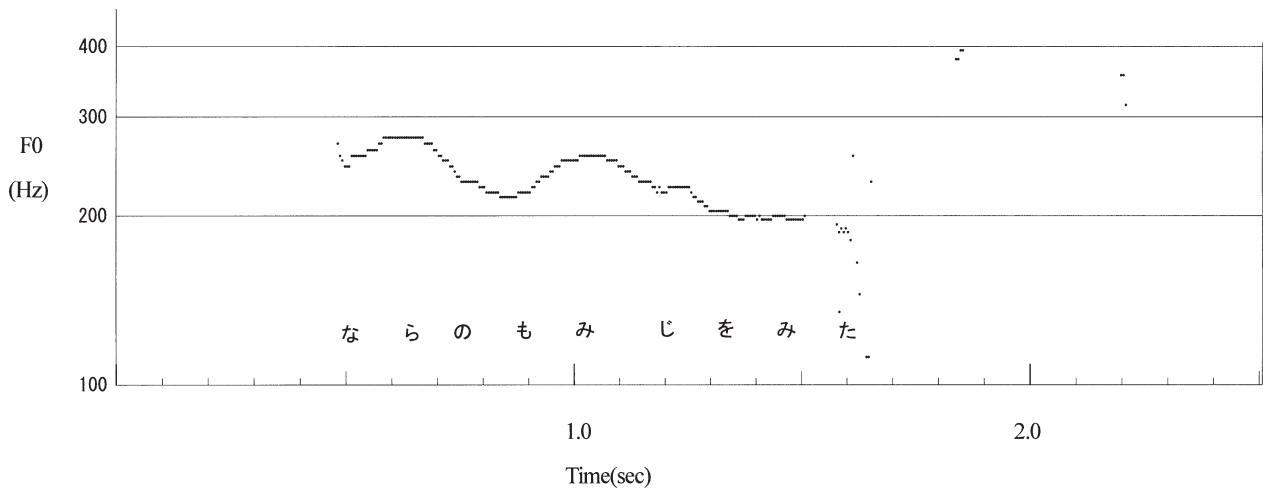


図1-1 「奈良のもみじを見た」(OKA01)

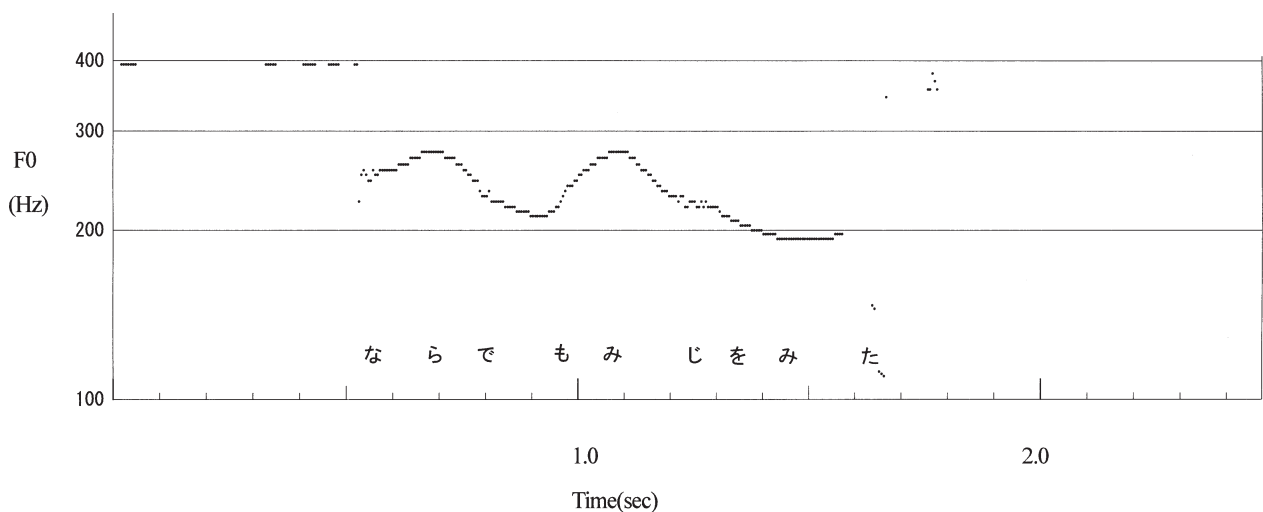


図1-2 「奈良でもみじを見た」(OKA01)

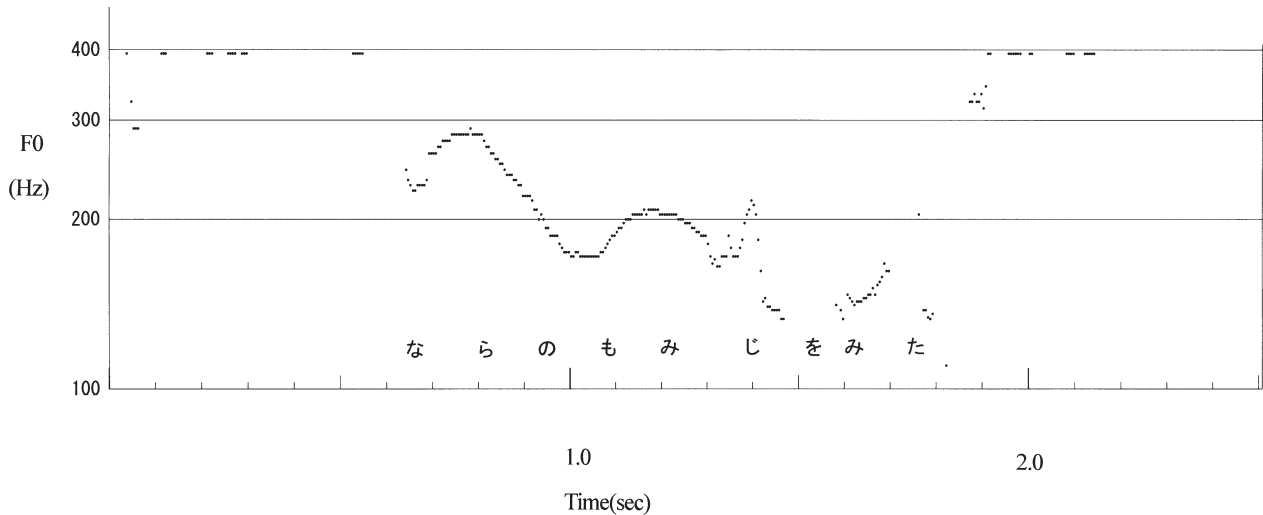


図2-1 「奈良のもみじを見た」(KAG02)

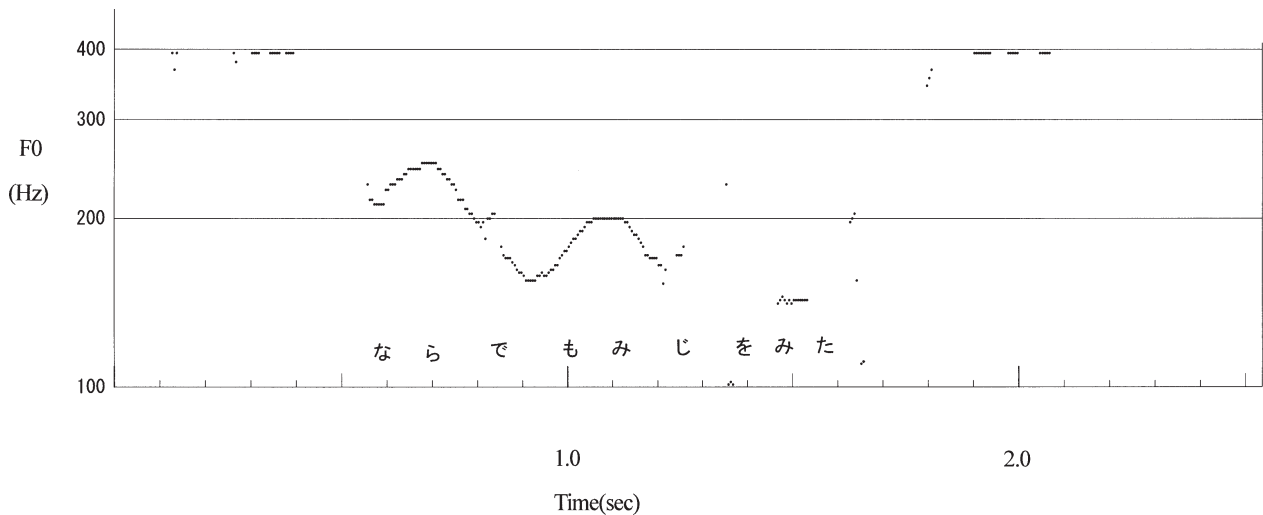


図2-2 「奈良でもみじを見た」(KAG02)

### 3.3.3 聴覚印象で差がみられなかった話者について

多くの話者は聞いただけでは「奈良のもみじを見た」と「奈良でもみじを見た」の間で差は感じられなかった。図3はOKA04の発話である。前章でみたKAG02の発話と比べるとピーク間の谷は浅く、またピークの高さの差を比較しても、図3-1「奈良のもみじを見た」と図3-2「奈良でもみじを見た」の間にそれほど違いは見られない。他の話者も、ピークの谷の深さは個人差があったが、高さの差については似たような傾向であった。

しかし、一見差がなくても、ほとんどの話者はピーク値を計測して比較すると、「奈良のもみじを見た」の「奈良の」と「もみじを」のピークの差のほうが「奈良でもみじを見た」の「奈良で」と「もみじを」の差よりもわずかでも差が見られることがわかった。一例としてKAG05の発話資料のF0曲線を図4に、図1から図4の発話のF0ピーク値をst換算した結果(100Hzベース)を表1に示す。

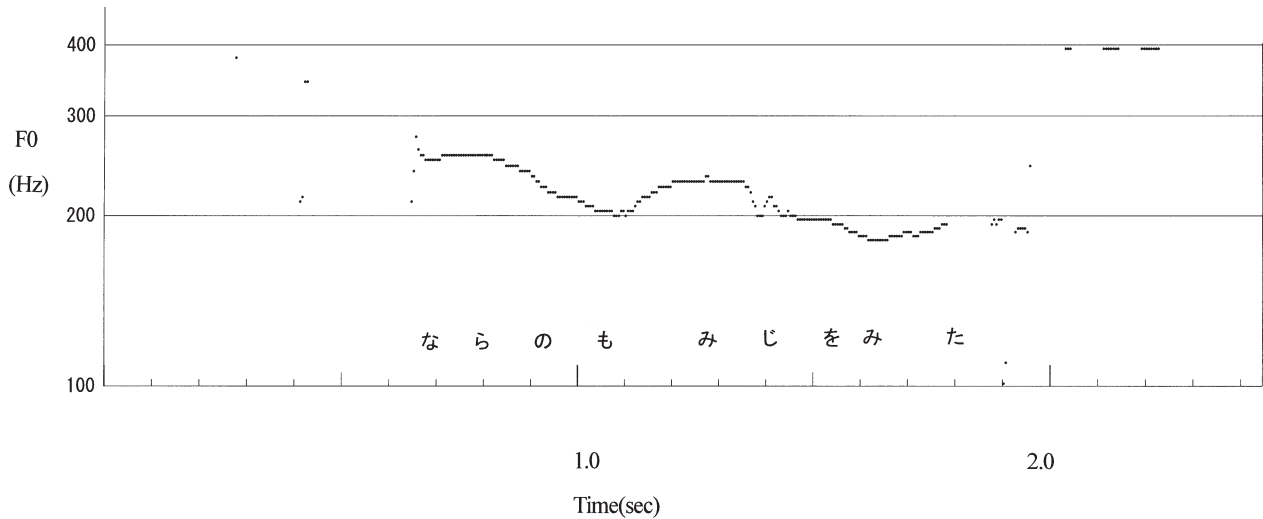


図3-1 「奈良のもみじを見た」(OKA04)

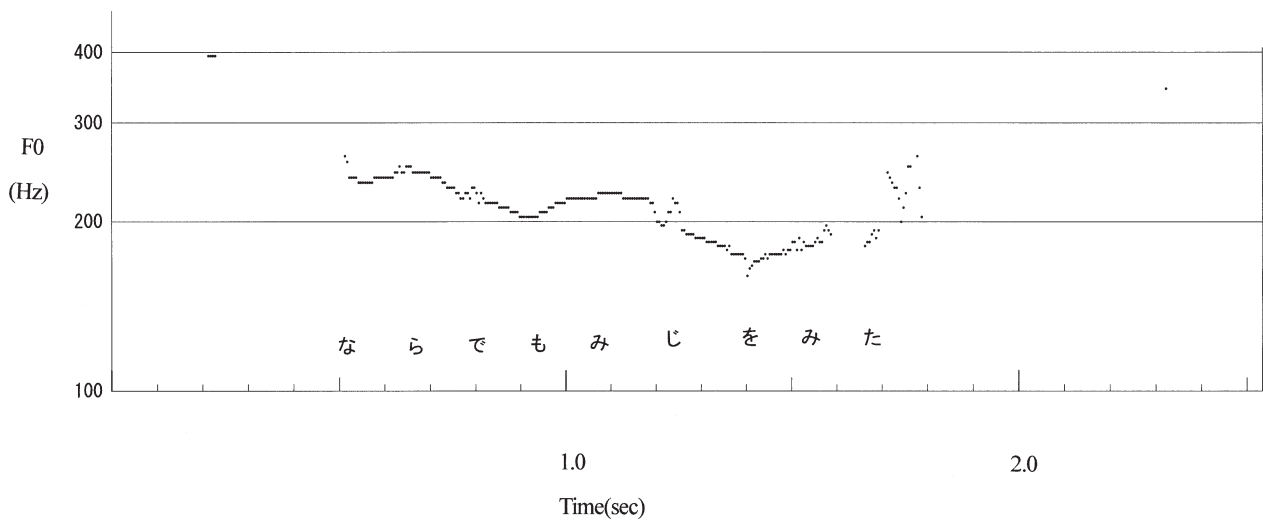


図3-2 「奈良でもみじを見た」(OKA04)

この中で、OKA04については、「奈良のもみじを」も「奈良でもみじを」もピークの差が1.5半音で、どちらも同じようなイントネーションになっていることがわかる。この話者については意味的な限定の有無にかかわらずアクセントを弱化させない傾向があると推測される。

### 3.4 岡山方言話者と香川方言話者のちがいについて

岡山方言は東京式アクセント、香川方言は京阪式アクセントである。今回調査で用いた文はどちらのアクセントでも型が同じであり、聞いたときに方言差が感じられることはなかった。また、F0曲線についても、今回提示したなかではOKA04のみがアクセントの山の間の谷が浅くみえるが、香川方言話者にも似たような曲線を示す話者もあり、とくに岡山方言話者の特徴であるとは言い難い。聴覚印象で「奈良のもみじを見た」と「奈良でもみじを見た」の差がわかった話者も岡山と香川それぞれにいたことから、今回の調査では二つの方言の間に明確な差はみられなかった。

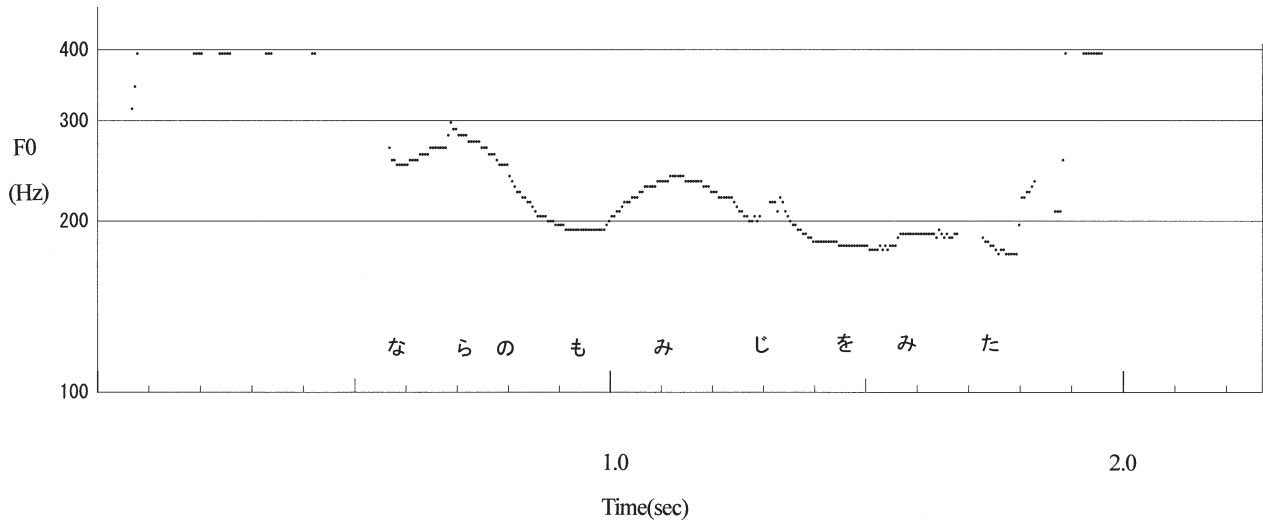


図4-1 「奈良のもみじを見た」(KAG05)

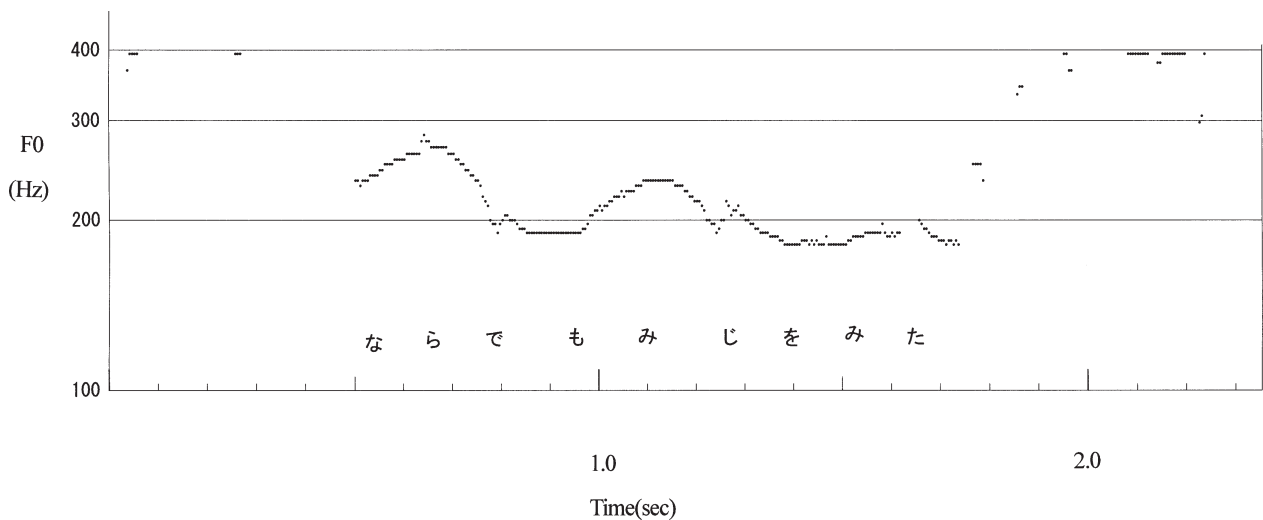


図4-2 「奈良でもみじを見た」(KAG05)

表1 「奈良のもみじを見た」「奈良でもみじを見た」の第一、第二文節のF0ピーク値 (st)

	奈良の (a)	もみじを (b)	(a) - (b)	奈良で (c)	もみじを (d)	(c) - (d)
OKA01	18.0	16.3	1.7	18.0	18.0	0.0
KAG02	19.0	13.0	6.0	17.0	12.5	4.5
OKA04	17.0	15.5	1.5	16.5	15.0	1.5
KAG05	20.0	16.0	4.0	18.5	15.5	3.0

#### 4 まとめ及び今後の課題

「奈良のもみじを見た」「奈良でもみじを見た」という、すべて頭高型のアクセント型から成る2種類の文のイントネーションの差について10名の話者の音声資料の分析をおこなった。「奈良のもみじを見た」では「奈良の」が「もみじを」を意味的に限定しており、「もみじを」のアクセントの山のピークが抑えられる可能性がある。これに対し「奈良でもみじを見た」では「奈良で」が「もみじを」を意味的に限定しないため、「もみじを」のアクセントの山がおさえられる可能性が低い。その結果、この二つの文のイ

ントネーションは「もみじを」の高さに差がみられると予測される。10名の発話を聞き比べると、明らかに差があったのは2名、注意深く聞いて差が感じられたのは1名で他の7名の発話については聞いて差が感じられるほどの違いはなかった。これは音声分析をおこない抽出したF0曲線を観察してもほぼ同様であった。しかし、ピーク値を計測し、st換算して比較をおこなった結果、一見違いのない話者であってもわずかに「奈良のもみじを見た」のほうが「奈良でもみじを見た」のときよりも「奈良の」と「もみじを」の差が大きいようすが観察された。

今回は発話データの数が少なく、またF0値の比較についても細かいところまで分析ができなかった。F0ピーク値の差も、統計的に有意な差があると言えるかどうかについてはデータ数を増やしたうえでの検証が必要であり、今後さらに分析をすすめたい。

## 謝辞

調査に協力してくださった皆様に感謝いたします。

## 引用文献

今石元久編（2005）『音声研究入門』和泉書院。

窪菌晴夫（1995）『語形成と音韻構造』くろしお出版。

郡 史郎（1997）「日本語のイントネーション型と機能－」『日本語音声2－アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』169-202, 三省堂。

郡 史郎（2008）「東京方言におけるアクセントの実現度と意味的限定」『音声研究』12巻1号, 34-53。

Kubozono, Haruo（1993） *The Organization of Japanese Prosody*, Kurosio Publishers.